

[論文]

「キリストの信条」—フィリップ・シャフの 終末論的キリスト教再一致の展望¹

藤野雄大

序論

2019年は、フィリップ・シャフ（Philip Schaff：1819-1893）の生誕200年を記念する年であった²。シャフはアメリカを代表する教会史家として卓越した業績を残しただけでなく、ドイツ改革派の神学校の教授を務めていた時には、同僚であったジョン・W. ネヴィン（John Williamson Nevin：1803-1886）らとともに、マーサーズバーグ神学（Mercersburg Movement）と呼ばれる神学運動を提唱したことも知られている³。さらに、シャフは、セクト（分派）の乱立によって分裂させられた19世紀半ば以降のアメリカのプロテスタント教会を批判し、教会の再一致に向けて積極的な提言を行った。このようなシャフの教会再一致に関する議論は、20世紀に活発化した、いわゆるエキュメニカル運動（教会再一致運動：Ecumenical Movement）に対する先駆的役割を果たしたとして、現在でもアメリカ教会史家の間では高く評価されている⁴。

一方、日本では、シャフの神学は、これまで十分に評価されてきたとは言いがたい状況で

¹ 本稿は、2019年6月25日東京神学大学において行われた「博士課程後期課程学生研究発表」において発表したものを加筆修正したものである。

² 日本では、ほとんど関心を持たれることはなかったが、マーサーズバーグ神学の専門家によって構成されているアメリカのマーサーズバーグ学会（Mercersburg Society）では、2019年度の学会発表（Convocation）期間中に、シャフの生誕200周年を記念する会が催された。

³ シャフが務めたドイツ改革派の神学校は、当時はペンシルヴァニア州マーサーズバーグに存在した。マーサーズバーグ神学の名称は同地に由来する。この神学校は、マーサーズバーグが南北戦争の戦火に巻き込まれたため、のちに同州ランカスターに移転した。現在も同地に存在するランカスター神学校（Lancaster Theological Seminary）は、その教派的伝統を継承している。なおシャフは、マーサーズバーグの神学校に1845年から1865年まで在籍している。同神学校の歴史については、George Warren Richards, *History of the Theological Seminary of the Reformed Church in the United States 1825-1934 Evangelical and Reformed Church 1934-1952* (Lancaster, PA: Rudisill and Company, INC. 1952), 243-64, 315-343を参照のこと。

⁴ 先行研究によるシャフの評価については後述する。

ある。しかしながら、シャフの広範な教会史に対する学識と、それに基づいてなされた教会の将来における再一致への洞察、さらにその展望を具体化していく行動力は、今日でもなお示唆に富んでいると考える。そこで、本論では、シャフ生誕から200年を経た現在、シャフの神学を再評価する意図を込めて、特にシャフの後半生（1870年代以降）を中心に、その教会再一致の展望を論じていく。

1. 問題の所在：先行研究の議論を巡って

シャフの教会再一致に関する神学を論じるにあたって、まず先行研究を概観したい。要約的に言えば、シャフの教会再一致への展望、いわゆるエキュメニカルな神学に関する先行研究は、二つの傾向に大別することができるだろう。第一の傾向としては、20世紀を通して重要なテーマとして活発な議論が交わされてきたキリスト教諸教派間の対話と相互理解への取り組みの進展という文脈の中で、エキュメニズムに対するシャフの先駆的、あるいは預言者的役割を評価しようとするものである。一方、第二の傾向としては、特に20世紀後半以降、アメリカ教会史への専門的研究が深められていく中で、アメリカ教会史の文脈において、シャフの神学思想を読み解こうとするものである。

第一の傾向である20世紀型エキュメニズムという観点からのシャフの神学に関する研究は、古典的なものと言ってよい。事実、それらの研究は、20世紀におけるエキュメニカル運動の隆盛と密接に結びついたものであった。

例えば、1910年に行われ、20世紀型エキュメニズムの出発点となったエディンバラ世界宣教会議（The Edinburgh Missionary Conference）の後、Rufus W. Miller や David S. Schaff らによって、シャフの教会再一致の神学が注目されるようになった⁵。さらに1960年代には、第二ヴァチカン公会議に基づいて、ローマ・カトリック教会が、東方教会やプロテスタント諸教派との対話と相互理解への関わりを深める中で、シャフの先見性は、プロテスタント教会の枠組みを越えて高く評価されることになった。その典型例として、第二ヴァ

⁵ Rufus W. Miller, "Philip Schaff, Prophet and Pioneer of Christian Unity and the Manifestation of Unity," *The Reformed Church Review* 18 (1914): 234-262. David Schley Schaff, "Philip Schaff, the Advocate of the Reunion of Christendom," *The Reformed Church Review* 21 (1917): 1-13. これらの論文が収録されている *The Reformed Church Review* は、シャフ自身も20年近くにわたって教鞭をとったドイツ改革派の神学校が発行する機関誌であり、シャフやネヴィンが展開したマーサーズバーグ神学を知るための基本史料となっている。また David S. Schaff は、シャフの実子であり、シャフの詳細な伝記も記している。David S. Schaff, *The Life of Philip Schaff: In Part Autobiographical* (New York: Charles Scribner's Sons, 1897)。同書はシャフの生涯を知るための貴重な史料であり、本論でも引用している。

チカン公会議終了から2年後の1967年に発表されたJames H. Smylieの論文をあげることができる⁶。Smylieの論文は、第二ヴァチカン公会議の進展を踏まえて、1965年にノートルダム大学の学長であったTheodore M. Hesburghが、ローマ・カトリック、東方教会、英国教会、そしてプロテスタント諸教派の神学者から成るエキュメニカルな組織を提唱したことに触発されたものである。そして、そのような歴史的文脈の中で、Smylieは、シャフのエキュメニカルな神学の楽観性を指摘しつつも、1960年代における諸教派間対話と一致協力の実現という出来事が、シャフのエキュメニカルな神学を反映、あるいは部分的に成就したものであると肯定的に評価している⁷。このようなシャフのエキュメニカル運動への先駆的役割を評価する論考は、その後も引き継がれていくことになった。Smylieの論文からおおよそ30年後の1980年代、90年代に発表されたGeorge Shriverや、John B. Payne、そしてJohn C. Meyerの研究を一例として挙げることができよう。これらの研究にも、シャフのエキュメニカルな神学を20世紀のエキュメニズムの進展という文脈の中で再評価しようとする傾向は明確に表れている⁸。これらの中でもShriverの著作は、1987年に記されたものではあるが、出版からおおよそ30年を経た現在でもシャフの教会再一致論に関する最も整理された研究の一つとして重要性を保っている。

Shriverは、母国であるスイスやドイツでの学生時代から、アメリカ移住後、そして晩年にいたるまでのシャフの全生涯にわたる伝記的著述を通して、シャフのエキュメニカルな神学の一貫性を指摘している。すなわち、Shriverによれば、ベルリン大学時代に芽生え、渡米直後になされた教授就任講演(*The Principle of Protestantism*)にあらわれた「福音主義的カトリシズム(Evangelical Catholicism)」,あるいは「プロテスタント的カトリシズム」(Protestant Catholicism)というシャフの前半生における教会再一致への展望は、その後約40年にわたるアメリカでのシャフの活動にも一貫して見られるということである⁹。

確かに、Shriverらの研究が示すように、20世紀型エキュメニズムを先取りする先見性

⁶ James H. Smylie, "Philip Schaff: Ecumenist the Reunion of Protestantism and Roman Catholicism," *Encounter* 28 no. 1 (1967): 3-16.

⁷ Smylie, "Philip Schaff," 3.

⁸ George H. Shriver, *Philip Schaff: Christian Scholar and Ecumenical Prophet* (Macon, Georgia: Mercer University Press, 1987); John B. Payne, "Philip schaff: Christian Scholar and Prophet of Ecumenism," *Prism* 9 no. 2 (1994): 28-42; John C. Meyer, "Philip Schaff as an Ecumenical Prophet: A Fresh Look at an Old Plan for Christian Reunion," *The Ecumenical Review* 47 no. 1 (1995): 52-59.

⁹ Shriver, *Philip Schaff*, 113-114. なおシャフの就任講演は、その後出版され、シャフの代表作の一つとなっている。正式な原題は以下の通り。Philip Schaf, *The Principle of Protestantism as Related to the Present State of the Church* (Chambersburg, PA: Publication Office of the German Reformed Church, 1845).

をシャフの神学に見出すことは難しくない。その意味において、20世紀のエキュメニズムの進展の中で、シャフの神学に注目するのは、ある一定の妥当性があると言える。

しかし、同時にこれらの研究の問題点もまた、まさに20世紀のエキュメニカル運動という文脈を前提にしているという点によっていると指摘できよう。つまり、Shriverらの研究は、20世紀のエキュメニカル運動の進展という文脈に力点を置いているがゆえに、シャフが生きていた19世紀当時の文脈の中で、シャフの教会再一致の神学の形成過程に対する分析や、その限界や問題点への批判的考察が十分になされているとは言い難いのである。

一方、第二の傾向であるアメリカ教会史の観点からシャフを理解しようとする研究が、1960年代以降に盛んになっていく。その契機になったのが、James Hastings Nicholsの*Romanticism in American Theology*であった¹⁰。Nicholsの貢献は、それまでローカルな関心を集めるに留まっていたネヴィンやシャフが、19世紀だけでなくアメリカ教会史全体の中でも、特に独自性を持った注目に値する神学者であったことを明らかにしたことにある¹¹。Nicholsの著作は、マーサーズバーグ神学全体を網羅しているが、その中でも、とくに第5章「シャフの歴史的発展の理論」(“Schaf’s [原文のまま] Theory of the Historical Development of the Church”)において、シャフと同時代の神学者であったニューマン(John Henry Newman)と対比させつつ、シャフのエキュメニカルな神学に焦点を当てている¹²。

同章において、Nicholsはシャフの前半生、特に*The Principle of Protestantism*における「歴史的発展の理論」(the theory of historical development)を中心に考察している¹³。そしてNicholsは、19世紀当時のプロテスタンティズムが、16世紀の宗教改革の精神から逸脱し、主観主義(subjectivism)、合理主義(rationalism)、分派主義(sectarianism)といった病気(disease)に陥っているとしたシャフの分析的的確さを評価している。さらに、シャフが、「歴史的発展の理論」に基づいて、ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会の歴史的連続性、あるいは共通性を指摘することによって、アメリカのプロテスタント教会に対して、ローマ・カトリック教会を含む他のキリスト教をよりよく理解するためのエ

¹⁰ James Hastings Nichols, *Romanticism in American Theology: Nevin and Schaff at Mercersburg* (Eugene, Oregon: Wipf & Stock Publishers, 1961).

¹¹ Nichols, *Romanticism*, 3.

¹² Nichols, *Romanticism*, 107-139. なおNicholsによるシャフのスペルは誤表記ではなく、渡米後数年の間はSchafを用い、後にSchaffと表記するようになったようである(David S. Schaff, *The Life of Philip Schaff*, 2)。しかし今日まで多くの研究者は、Schaffの方を採用している。

¹³ Nichols, *Romanticism*, 115-116. なお、歴史的発展の理論については本論の中で後述する。

キュメニカルな歴史的視点を提供することになったと結論付けている¹⁴。

シャフがドイツで神学教育を受けた際に受容した歴史的発展の理論が、シャフの教会再一致の神学にも影響を与えたとするNicholsの分析は首肯できる。しかしNicholsの研究は、あくまでシャフの前半生における歴史的発展の理論について中心的に考察したものであり、シャフの生涯にわたるエキュメニカルな神学全体を論じたものではない。この点において、Nicholsの研究を補いつつ、シャフの晩年に至るまでの発展過程をたどることが求められている。

Nicholsに続くものの中で特筆に値するのが、1990年代に表れたStephen R. Grahamの研究である¹⁵。Grahamは、その著書の第7章「アメリカにおける福音主義的カトリック的キリスト教」(“Evangelical-Catholic Christianity in America”)において、アメリカにきた当初から晩年に至るまで、シャフの教会再一致への展望がどのように発展を遂げたのかを論じている。Grahamは、Shriverと同様に、シャフが1840年代半ばの渡米直後から1890年代の晩年にいたるまで一貫してキリスト教の再一致、エキュメニカルな展望を究極の目標として持ち続けていたことを認めている。しかし、同時にGrahamは、個人主義と分派主義的傾向が支配的だった19世紀当時のアメリカのプロテスタント教会の中に身を置くことによって、キリスト教の再一致へのシャフの理解が深化していったと主張している¹⁶。

より具体的には、アメリカの「混沌とした」(chaotic)教会の現実を認識する中で、シャフが、終末における制度的な一致、つまりキリストを頭とする、完全な意味での「一つの福音主義的・カトリック的教会」(one evangelical-catholic church)を最終目標として展望しつつも、終末前の歴史においては、教派間協力といった多元的な外的組織における協力関係という形式(a form of cooperation among a plurality of external organizations)による教会の再一致の実現を目指すようになったということである¹⁷。Grahamの研究の優れた点は、シャフの前半生だけでなく、アメリカにおける生涯全体を俯瞰しつつ、19世紀当時のアメリカ教会史の文脈の中で、シャフのエキュメニカルな神学の発展を考察したことに

¹⁴ Nichols, *Romanticism*, 138-139. Nicholsは、次のように結論付けている。「(シャフの)歴史的発展の理論は、そのあらゆる点における両義性によって、それ以外の方法では橋渡しすることができないほど隔たっている他のキリスト教の形態を理解するための橋渡しの役割を果たした。」(同書139)

¹⁵ Stephen R. Graham, *Cosmos in the Chaos* (Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 1995)

¹⁶ Graham, *Cosmos in the Chaos*, 209-234.

¹⁷ Graham, *Cosmos in the Chaos*, 226-228.

ある。Graham が主張したように、シャフの教会再一致への展望は、ドイツにおける神学教育の影響を受けつつも、同時に、19世紀半ばから後半にかけてのアメリカ教会史の文脈と切り離すことはできないものである。しかし、一方で、Graham の研究には、19世紀当時のアメリカの教会史の中で、同時代の神学者と比較して、シャフの教会再一致への神学がどのような点において独自性を持っていたのか。あるいは、シャフのエキュメニカルな神学そのものについての批判的分析がまだ十分に展開されていない点がある。この点において、Nichols や Graham のような、アメリカ教会史の中で、シャフのエキュメニカルな神学を位置付ける研究は、今後、マクロな観点から、より個別的な比較研究、すなわちシャフと同時代の具体的な神学者、あるいは神学運動と対比しつつ、シャフのエキュメニズムの神学的独自性を明確にしていく必要があると言えよう。

最後に棚村重行の先行研究について触れたい¹⁸。序論でも述べたように、我が国では、これまでマーサーズバーグ神学については、ほとんど研究されてこなかった。その中で、棚村の論文は、シャフの教会再一致の神学を専門的に考察した邦語文献としては、おそらく今日に至るまでほとんど唯一のものと言ってよい。棚村の研究もまた、基本線としては Nichols や Graham の立場に属するものと言える¹⁹。棚村は、シャフを20世紀のエキュメニズムの先駆者、預言者として無批判的に称賛する先行研究の姿勢を批判している。そして、*The Principle of Protestantism* に見られるシャフの弁証法的歴史哲学に基づく教会の歴史的発展理解の巨視性、特に近代教会史への洞察を肯定的に評価している。しかし、一方で、棚村は、その巨視的教会史理解ゆえに、プロテスタンティズムとカトリシズムをより高次のものとして統合しようとするシャフの福音主義的カトリシズム理論は、しばしば理想が先行することになり、結果的に論理的整合性を欠き、矛盾をはらんだものとなったと指摘している。つまりマーサーズバーグ時代(1845-1864)における、シャフの教会史理解は、しばしば歴史哲学的観念が先行し、個別具体的な教会史上の論争、信条、あるいは教理についての実証的な歴史研究が不十分になっているという批判である。そして、結論として棚村は、より実証的な教会史研究と各教派の教理についての比較検討を行うことによって、シャフの先駆的なキリスト教再一致への視座を、現代のエキュメニズムの推進に生かすことができると提言している²⁰。棚村の批判と提言は示唆に富んでいる。確かにシャフの教会再一致の神学は、その先駆性を認めつつも、一方で十分な批判的検証に基づいて吟味さ

¹⁸ 棚村重行「教会の再一致を希求して—マーサーズバーグ時代の P. シャフの『福音主義的カソリズム論』—」『神学』60号, 127-151頁。(教文館, 1998年)

¹⁹ 棚村重行「教会の再一致を希求して」, 128頁。

²⁰ 棚村重行「教会の再一致を希求して」, 148-151頁。

れる必要がある。だが、棚村自身が論文中でたびたび言及しているように、棚村の論文は、1850年代までを中心としたシャフの前半生における教会の歴史的発展の理論および、その結果としての教会再一致論に焦点を置いたものである。そのため、棚村の論文では、シャフの後半生におけるエキュメニズムについては触れられていない。特にシャフが後半生に提唱した、教会再一致の基礎としての「キリストの信条」(Creed of Christ)を論じていない。そこで今後の研究の方向性としては、棚村の路線を引き継ぎつつ、シャフの神学の実証的分析を通して、19世紀の教会史的状况の中でシャフを捉えつつ、同時にシャフの神学の現代的意義を模索していく方向に推し進めることが望まれる。

これまで先行研究について論じてきた。これらの研究成果を概観する中で、いくつかの疑問が生じる。シャフの教会再一致の展望は、シャフの神学全体の中でどのように位置づけられるのか。シャフが具体的にどのようなプロセスを経て教会の再一致が可能になると考えていたのか。シャフの前半生から後半生までの教会再一致の理解における一貫性と発展性の関係はどのように位置づけるべきなのだろうか。

これらの疑問を踏まえつつ、本論ではシャフの後半生、とくに最晩年に執筆した『キリスト教の再一致』(*The Reunion of Christendom*)を中心に考察することで、シャフが最終的に到達した教会の再一致に向けたエキュメニカルな神学を論じていく²¹。そして、その考察を通して、本論では、シャフの後半生における教会の再一致への展望が、シャフの教会史理解の根幹をなす「歴史的発展の理論」から発展し、最終的には「キリストの信条」という概念に表れているように、キリスト論的、終末論的なものとなっていったということ明らかにしたい。

2. シャフの『キリスト教の再一致』(*The Reunion of Christendom*)について

シャフの『キリスト教の再一致』(以下、『再一致』)は、1893年9月22日に、シカゴで開催されていた万国宗教会議(*The Parliament of World Religions*)の中でなされた講演を基にしたものである²²。この講演からおおよそ1か月後の同年10月20日に、シャフは74

²¹ Philip Schaff, *The Reunion of Christendom* (New York: Evangelical Alliance Office, 1893). 邦語訳は存在しないが、本論では、便宜上、『キリスト教の再一致』という仮題を用いている。

²² シカゴ万国宗教会議は、コロンブスによる新大陸発見400年を記念して、シカゴで開催された万国博覧会の期間中に行われたものである。この会議は、キリスト教だけでなく、世界の諸宗教の代表が集まり、対話と交流を持つ場となったという点で画期的なものであった。アメリカ教会史の大家であるMartin E. Martyは、この宗教会議を20世紀におけるコスモポリタニズムの出発点として位置付けている。(Marty E. Marty, *Modern American Religion vol. 1 The Irony of It All 1893-1919*, Chicago: The

歳の生涯を閉じているので、同書は、文字通り、シャッフの絶筆となった。会議参加以前からシャッフの健康状態は危惧されており、シャッフは、無理を押して会議に参加するも、自らの力で講演を行う体力はすでに無かった。そのため準備してきた原稿は代読されることになったという。このことは、同講演に対するシャッフの情熱や使命感を伝えて余りある。伝記によれば、シャッフは、講演の冒頭で次のように語ったという。

医師や友人たちからは、シカゴには行かないように忠告された。彼らは、シカゴ行きは、わたしに死をもたらすだろうと言った。しかし、わたしは決意したのである。わたしが全生涯をかけて関心を持ち続けてきたキリスト教の再一致のために生涯最期の証しすることを。もし死ぬのであれば、この宗教会議の場で死ぬことを望んでいる。²³

この悲壮とも言える決意にも表れている通り、シャッフは生涯にわたってキリスト教の再一致を希求してきた。シャッフが生きたのは19世紀の前半から後半までであったが、これは、宗教改革期以来持ち越されてきた教会の分裂が、再一致に向かう過渡的時代であった。このような時代精神はシャッフの生涯と神学形成にも大きな影響を与えることになったのである。以下、シャッフの生涯を概観したい。

シャッフはスイスのグラウビュンデン地方のクールで生まれた。シャッフが生まれた家庭は改革派に属していたが、シャッフの育った村は、ルター派の信仰基準であるアウグスブルグ信仰問答を受け入れており、シャッフ自身も、同信仰告白に基づく信仰教育を受けた。またシャッフが生まれる直前、1817年には、プロイセン帝国下で、ルター派と改革派の合同教会が結成されている。そのためシャッフは、青年期をこのドイツの合同教会の中で過ごすこ

University of Chicago Press, 1986, 17-24.)

同会議は、宗教間の平和的対話と協調の促進という目的を掲げていたが、現代的な宗教多元主義というよりも、キリスト教の優位性を前提にした19世紀の宗教発展史観に基づいていた。例えば、実行委員会の書記としてイニシアティブを取った John Henry Barrows は次のように語っている。「会議は全ての宗教が平等に良いといった誤った理論に基づいているのではなかった。会議は、キリスト教的礼儀正しさと個々人の確信を尊重するという完全な誠実さという土台に基づいていた。」(John Henry Barrows, *Christianity the World Religion Lectures Delivered in India and Japan*, Chicago: A. C. McClurg and Company, 1897, 316) 実際、「主の祈り」を全ての宗教に普遍的な祈りとして会期中に他宗教の代表者も含めて唱えるように促したり、聖書が他の宗教にもテキストブックとなる普遍的な教えであると見なすなど、キリスト教の普遍性、あるいは他宗教への優越性を訴えるものであった。そのため当時のキリスト教以外の宗教者の反感も強く存在した。しかし、17日間の開催期間中、神道や仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教などの代表者を含め、延べ15,000人が参加するなど、諸宗教観対話の先駆けとして画期的意義をもっていたと言える。(Barrows, *Christianity*, 298-301)。

²³ David S. Schaff, *The Life of Philip Schaff*, 486.

とになった。このようなエキュメニカルな環境で育ったことが後年のシャフの教会観に大きな影響を及ぼすことになったとも考えることができるだろう²⁴。

しかし、そのようなシャフがアメリカに移住した後に直面することになったのが、19世紀前半にアメリカのプロテスタント教会に広範に影響を及ぼしたリヴァイヴァリズムによる分裂であった。リヴァイヴァリズムは、一面では、人々の霊的覚醒を促し、女性の権利、奴隷制反対運動、都市の治安の向上など大きな社会的貢献を果たした。しかし、一方で、19世紀前半のリヴァイヴァリズムは個々の教派固有の伝統や信条、信仰告白を軽視する傾向を持っており、その結果、リヴァイヴァリズムの受容を巡って、アメリカのプロテスタント教会は分裂を経験することになった²⁵。1837年に、新派・旧派カルヴァン主義の対立によって分裂した合衆国長老派教会（Presbyterian Church in the United States）や、シャフ自身も関わりの深かった合衆国のドイツ改革派教会で生じた分派による分裂は、その一例であると言える²⁶。シャフは、渡米直後から、リヴァイヴァリズムの結果生じた教会分裂（分派主義：sectarianism）を、アメリカのプロテスタント諸教派を蝕む「病気」であると批判し、教会の再一致を追求してきた²⁷。

このような19世紀前半の諸教派の分裂は、シャフにとって悲しむべき現実ではあったが、その中であつても事態は、時間の経過とともに改善しているとシャフには感じられただろう。19世紀後半には、アメリカのプロテスタント諸教派は再び一致へと向かうからである。例えば、先述の合衆国長老教会の分裂は1869年に再合同という形で収束することになった。また、シャフはただ教会の再一致を願うだけでなく、そのために精力的に活動し、成果を着実に挙げていた。例えば、北米初の超教派的な聖書翻訳・改訂作業（Revised Standard Version）や、超教派的なキリスト者の協力団体である万国福音同盟会（The Evangelical Alliance：福音主義同盟とも訳される。）の米国支部設立に、シャフは尽力した²⁸。

²⁴ David S. Schaff, *The Life of Philip Schaff*, 12-37.

²⁵ リヴァイヴァリズムについての議論は、拙論「ジョン・ウィリアムソン・ネヴィンの信条主義的神学にみる19世紀前半の米国におけるリヴァイヴァリズムと信条主義の対立の様相」（『歴史神学研究』創刊号、2017年、89-113頁）を参照。

²⁶ Bradley J. Longfield, *Presbyterians and American Culture: A History* (Louisville, Kentucky: Westminster John Knox Press, 2013), 91-115. および拙論「教派的伝統とアメリカ化の衝突—2つの改革派教会の経験した19世紀アメリカ」（季刊『教会』115号、2019年、14-29頁）、18頁参照。

²⁷ Philip Schaff, *The Principle of Protestantism*, transl. by John W. Nevin, (Bard Thompson and George H. Bricker, eds., *Lancaster Series on the Mercersburg Theology Vol. 1*, Philadelphia, PA: United Church Press, 1964), 140.

²⁸ David S. Schaff, *The Life of Philip Schaff*, 252-81, 354-89.

シャフにとって、これらの歴史的出来事は、教会が分裂から一致へと向かう希望の印であった。そのため、シャフは『再一致』においても、20世紀を目前にして、次のような預言者的な教会再一致への希望を語っている。「16世紀の宗教改革は分裂に終わった。しかし20世紀の宗教改革は、再一致で終わるだろう²⁹。」

この発言は、20世紀を経験し、21世紀を生きる私たちの現実からすれば、いささか楽観的すぎる展望として映ることも事実である。しかし、一方で、シャフの言葉は、20世紀のエキュメニズム運動の推進を予示していたかのようにも取れる。この点が、先行研究において、シャフが20世紀エキュメニズムの預言者、あるいは先駆者と評価されてきた理由である。しかしその評価の正当性そのものを問うことは本論の目的ではない。いずれにしても確かなことは、シャフにとって、万国宗教会議の中で発表した『再一致』は、言わば、生涯をかけて取り組んできた教会再一致についての集大成であり、遺言であるということである。それゆえに同書は、シャフの教会再一致論を理解する上で、欠かすことができない重要性を持っていると言えよう。それでは同書において、シャフは具体的にどのような教会一致の展望を語っているのであろうか。

シャフは、教会の分裂から再一致に至る過程として三つの段階があることを論じている。それは、1.「個人的 (Individual)」, 2.「連盟的 (Federal)」, 3.「有機的 (Organic)」という三通りの一致の形態である³⁰。この内、第一の「個人的」一致というのは、様々な教派に属するキリスト者個々人が、自発性をもって、伝道や教会再一致を目指すための団体に関わることを指す。具体例としては、シャフは、自身も深く関わった万国福音同盟会を挙げている。ここで重要なことは、シャフが、万国福音同盟会のようなキリスト者個人の一致促進を教会の再一致の最初の段階と見なしつつも、それで十分とは考えていないということである。シャフにとっての教会の再一致とは、教派を主体としたものであり、キリスト者個々人の一致協力は、あくまで過渡的段階と捉えられていたことが分かる³¹。

第二の「連盟的」形態とは、先述のキリスト者個々人の関わりから一歩進んで、諸教派が主体となる一致協力を指す。シャフは、ここで「連盟的」形態には、以下の二つの形態があると語っている。一つは国内や海外伝道、あるいは慈善事業のために、諸教派が、それぞれの自主性や独自性を保ちつつ、連盟的な一致協力を促進するものである。1937年に設立され、20世紀の教会再一致運動を象徴するものとなった世界教会協議会 (the

²⁹ Schaff, *The Reunion*, 14.

³⁰ Schaff, *The Reunion*, 14-15.

³¹ Schaff, *The Reunion*, 16-17.

World Council of Churches, 通称 WCC) も、この形態に属すると言えよう。

また、シャフは、教義的合意に基づく教派間一致も、この第二の「連盟的」形態の中に含めている。それは、同一の教派的伝統を持つ諸教会が、それぞれ共通の信仰の基準（例えば、改革派におけるハイデルベルグ信仰問答、ルター派におけるアウグスブルグ信仰告白、長老派におけるウェストミンスター信仰基準など）に基づいて再一致する形態である。シャフは、その例として、改革派的伝統を持った諸教会の連合体である改革派教会同盟（The Alliance of the Reformed Churches, 1875 年設立）や北米と英国のメソジスト教会をつなぐ汎メソジスト協議会（The Pan-Methodist Conference, 1881 設立）などを挙げている。

シャフが挙げた具体例からも分かるように、この「連盟的」形態による再一致は、19 世紀後半に主にプロテスタント諸教派で促進された共通する教派伝統的のルーツを持つ諸教会の親睦的連合体という点で、19 世紀当時の教会再一致論の到達点とも言える。そのためシャフも、この連盟的再一致を積極的に評価している。しかし、シャフにとっては、この「連盟的」形態も、まだ過渡的なものであり、教会の最終的再一致ではなかった³²。

シャフが、究極の教会再一致の形態と考えたものが、第三の「有機的」形態であった。シャフが語る「有機的」形態とは、彼自身の言葉を用いれば「一つの教会統治形態によってすべての教会が統一されるもの」ということになる³³。

シャフは、この一つの教会統治形態による諸教会の統一を論じるにあたって、まずローマ・カトリック教会の例を挙げている。しかしシャフによれば、ローマ・カトリック教会は、確かに教皇制に基づく唯一のキリストの教会を掲げてはいるが、教皇制による教会再一致あるいは再統一は実現不可能なものであるとともに、不適切なものでもあった。なぜなら、教皇制に基づく再一致では、東方正教会やプロテスタント教会の歴史的固有性、独自性は正しく理解されることはないからである。シャフは、キリスト教諸教派の存在は、否定されたり、解消されるべきものではなく、重要な教会史的意義を有していると考えたのである³⁴。

そのため、シャフは、ローマ・カトリック教会、東方正教会、プロテスタント教会が、それぞれの固有性を保ちつつ、キリストにある一つの群れとしての再一致を目指していく方向性を模索した。それゆえに、シャフの教会再一致論は、極めてキリスト論的、より正確には徹底してキリスト中心 (Christ-centered) 的なものとなっている。このことは、シャ

³² Schaff, *The Reunion*, 17-19.

³³ Schaff, *The Reunion*, 15.

³⁴ Schaff, *The Reunion*, 15.

フの次の言葉にも表れている。

キリストは代理人（教皇）を必要としない。キリストは、永遠に生きておられる教会の頭であり、あらゆる場所で、あらゆる時代にも現臨しておられる。キリストは、私たちに一人の牧者（shepherd）の下にある一つの群れ（flock）を約束されたのであって、一つの囲い（fold）の下ではない。〈中略〉キリストの群れは一つである。しかし、そこにはたくさんの囲いがある。そして「天には部屋がたくさんある」のである。³⁵

この言葉には、シャッフの教会再一致論の骨子というべきものが表れていると言えよう。それはすでに述べたように、キリスト中心であるということである。シャッフによれば、教会の頭であり、唯一にして永遠の牧者であるキリストだけが、教会の究極的な統治者であって、キリスト以外の仲保者は必要ではない。そして、このようなキリストによる教会の再一致という理解は、必然的に終末論的な強調を含むことになった。なぜなら教会の再一致は、現在はまだ完成していないが、世の終わりにおけるキリストの再臨と神の国の成就によって、完全な形で実現することになるからである。

さらに、先の引用にもあるように、終末の時にもたらされることになる教会の究極的再一致とは、一つの教派的伝統、あるいは教会統治形態だけが残るのではなく、すべての教派が独自の教派的伝統と統治形態を保持しつつ、「キリストの一つの群れ」の中に複数存在する「囲い」あるいは「部屋」として存続するものであった。このようなシャッフのエキュメニズムは注目に値するものである。ここで、シャッフは、教派の存在そのものを悪しきものとする無教派的再一致論とは一線を画している。シャッフは、教派を終末におけるキリストの再臨によって解消されるものではなく、むしろ終末論的再一致の基礎として位置付けているからである。

この点において、シャッフの教会再一致論は、19世紀前半にアメリカで生じた教派的伝統を否定し、原始教會的教会再一致を目指した原始主義（Primitivism）や、万国福音同盟会のような無教派型の教会合同とは根本的に異なっている。さらに、ただ同一教派内部の再一致を目指すものでもなかった。シャッフが展望したのは、キリストの主権の下で、終末論的に成し遂げられる諸教派の再一致であったのである。

それでは、シャッフは、どのように、この「有機的」再一致が達成されると考えていたの

³⁵ Schaff, *The Reunion*, 15.

であろうか。シャフは、以下の5つの点を教会の再一致を促進する方法として挙げている。

1. 教派を超えた個人的つながりの中で、融和的 (irenic) で福音的かつ公同的な (evangelical-catholic) な精神を養うこと。2. キリスト教的、博愛的活動における協力を通して、成熟した信頼関係と関心を高めること。3. 国内外での宣教団体における一致協力。4. 教会史研究の進展によって相互の偏見を正し、成熟した理解を促進すること。5. それらすべてを満たすものとしてのキリスト者がキリストの下に一つになるための祈り³⁶。

ここで挙げられている5つは、シャフ自身も含め、19世紀後半までに、すでに実践されてきた事柄である。換言すれば、シャフは、終末論的、キリスト論的な教会再一致を目指しつつも、同時に現実的なプロセスを積み重ねていくことで、教会合同が促進されていくと考えていたと言えるだろう。

この中で特に興味深いのは、4番目に掲げられているように、シャフが教会史研究の進展をキリスト教再一致に資するものと捉えていたことである。教会史研究に関して、シャフは、諸信条、信仰告白の研究が最も重要なものだと述べている³⁷。それは、シャフが、単なる目的論的一致、つまり伝道や慈善事業といった特定の目的のための協力を留まらず、より内実を伴う再一致を追求していたことを意味している。さらに、シャフは、そのような教会再一致論を机上の空論とはせず、実現のために尽力してきた。19世紀における信条学の大家としてシャフの名声を不動のものにした全三巻に及ぶ『キリスト教の諸信条』(*The Creeds of Christendom*) は、その具体的な成果であった。この信条研究の強調は、シャフが教会再一致に当たって、信条に表れている教理的な一致が不可欠のものだと考えていたことを示している。しかし、シャフにとって、それはただ過去の諸信条、信仰告白の歴史学的研究だけを意味していない。シャフは、教会再一致を推進するために、新しい信条が必要とされていると考えるに至った。そのことは、シャフの「すべての教派は、どの教派にも共通する中心的な条項に関する短く、親しみやすく、そして調和的な信条を準備すべきである」という言葉にも表れている³⁸。そして、後述するように、その発想は、後半生のシャフが強調するに至った「キリストの信条」という信条理解に結びついていたのである。

³⁶ Schaff, *The Reunion*, 38–40.

³⁷ Schaff, *The Reunion*, 39.

³⁸ Schaff, *The Reunion*, 14.

3. 教会の歴史的発展の理論 (theory of historical development of church) と教会再一致論の関係

これまでシャッフの『再一致』におけるキリスト教の再一致を巡る議論を概説してきた。その結果、分かったことは、晩年のシャッフが、キリスト論的で、終末論的な教会再一致の展望を抱いていたことである。それでは、なぜシャッフは、このような教会再一致論を持つに至ったのだろうか。シャッフの神学体系の中で、その教会再一致論は、どのように位置づけられるのだろうか。

結論的に述べれば、Nicholsの先行研究でも指摘されているように、シャッフの教会再一致論は、彼の教会の歴史的発展の理論と密接に結びついていると言える。Nicholsはシャッフの前半生を中心に両者の関係性を論じているが、後半生においても、それは基本的には当てはまる。

教会の「歴史的発展の理論」については、弁証法哲学とも呼ばれる非常に抽象的な概念を含んでおり、限られた紙数で言い表すのは困難である。しかし、ごく簡潔に説明すれば、教会の歴史を静的、不変的なものではなく、有機的に発展するものと見なす歴史観に基づくものである。この「歴史的発展の理論」は、ドイツの歴史哲学者ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel: 1770-1831) に淵源するものであり、19世紀の歴史学に大きな影響を与えた。シャッフは、ベルリン大学に在学中に、ネアンダー (Johann August Wilhelm Neander: 1789-1850) の下で、この歴史的発展の理論を学んだ³⁹。

この理論では、歴史的発展は、テーゼ (thesis) と呼ばれる既存の概念に対して、それと相反するアンチテーゼ (anti-thesis) と呼ばれる新しい概念が出現することで、まず混乱や対立が引き起こされることから始まる。しかし、その混乱は、やがてはテーゼ、アンチテーゼ双方を調停、統合するジンテーゼ (synthesis) が登場することによって、より高次の次元へと歴史を発展させていくことになるとう理解されることになる。

この理論が教会史に適用されるならば、教会史上に生じる教義論争や異端による分裂などは、既存のテーゼとしての正統的教義や教会に挑戦するアンチテーゼと見なされ、それはより高次の調停的な教義や教会の再一致というジンテーゼによって乗り越えられていくことになる。これが「歴史的発展の理論」を教会史に適用した場合の基本的理解となる。この理論を適用することにより、シャッフにとって異端や教理論争などは、教会の弊害 (あ

³⁹ David S. Schaff, *The Life of Philip Schaff*, 17-37.

るいは病気)ではあるが、避けるべきものではなかった。むしろ教会の発展を促す「外的 (external) 要因」として積極的意義を持つことになったのである。しかし、一方で、シャフにとって、教会の発展は、そのような外側から働きかける人為的、あるいは偶発的な要因によってだけ促されるものではなかった。

シャフは、教会の発展を促す、より決定的なものとして「内的 (internal) 要因」を挙げている。そして教会を発展させる、この「内的要因」こそが、教会の命であるキリストに他ならない。ここにおいて、シャフの「歴史的発展の理論」は、キリスト論的強調点を持つことになる。シャフは、「教会がキリストの体」であり、キリストは教会の頭であるという古典的教会論から議論を展開していく。そして、教会とは、キリストから命を受けて成長する有機的なものであると理解した⁴⁰。

シャフは、この教会の有機的発展の理論を植物に例えて説明している。それによれば教会は、キリストを種として成長し、風雨や日光などの外的要因を受けつつも、幹を伸ばし、葉を広げて、実を結ぶのである。ここで重要なのは、教会の成長は、発展であって変化ではないということである。シャフの例えを用いるならば、「櫨の木がどんなに変化しても、リンゴの木にはならないように、教会も教会であることをやめることは決してない」ということになる⁴¹。

以上述べてきたように、シャフの教会発展の理論は、多分に理念的であり、教会史の実証的研究に耐えうるものかどうかは疑問が残るものである。しかし一方で、この理論によって、シャフは、神学的強靱さ、あるいはしなやかさとも表現しうるものを獲得することができたとも言える。すなわち、キリスト論的かつ終末論的な教会の発展史観に立つことで、シャフは、たとえ現実の教会がどれほど分裂や論争に翻弄されようとも、将来 (終末) における教会の再一致を展望することができたのである。この点において教会の「歴史的発展の理論」は、シャフの教会再一致論に決定的な影響を与えたと見なすことが出来よう。

4. シャフの「キリストの信条」(Creed of Christ) について

シャフのキリスト論的、終末論的エキュメニズムが、その「歴史的発展の理論」と結び

⁴⁰ Philip Schaff, "What is Church History? A Vindication of the Idea of Historical Development (1846)," in *The Development of the Church: "The Principle of Protestantism" and Other Historical Writings of Philip Schaff*, edited by David R. Bains and Theodore Louis Trost (Eugene, Oregon: Wipf & Stock, 2017), 255, 287, 291.

⁴¹ Schaff, "What is Church History?," 289-293.

ついているとすれば、その結びつきが最も端的に表れているのが、シャッフの提唱した「キリストの信条」という概念であると言える。すでに論じたように、シャッフは、終末に向かって教会の再一致が進められるために、諸教派に共通の新しい信条が求められていると主張した。その新しい信条こそが「キリストの信条」とシャッフが呼ぶものに他ならない。

シャッフは、『再一致』において、すべての教派はキリスト化 (christianized) されるべきであり、またすべての信条は、「キリストの信条」によって一致されるべき (unified in the creed of Christ) であると語っている⁴²。しかし、残念ながら、シャッフは、それ以上具体的に「キリストの信条」について言及することはない。

シャッフの提唱に「キリストの信条」は、「キリストについて」の信条なのだろうか。あるいは「キリスト御自身が制定する信条」なのだろうか。様々な疑問が生じるが、結論を先取りして言えば、「キリストの信条」は、一人のキリスト者によるものでも、教会間の教義的対話によるものでもなく、終末に向かう中で、キリストの体なる教会によって育まれるものと言うことができるだろう。つまり「キリストの信条」の具体的内容については、キリストの命と結びついた教会の有機的生命から生じるものであり、終末論的に示されるものなのである。だからこそ、その具体的内容については、シャッフにも語りえず、結果的に沈黙せざるを得なかったと考えられる。

この「キリストの信条」という言葉は、シャッフの歴史的発展の理論と結びついているが、管見では、シャッフの前半生、つまりマーサーズバーグ時代には見られないものである。それゆえに、この言葉は、後にシャッフの信条研究、教会再一致の理論が深化する中で生じたものだと考えることができる。

マーサーズバーグ時代のシャッフは、同僚のジョン・W. ネヴィンと同様に、教会の一致の基礎として使徒信条を重んじ、また使徒信条の解説を含むドイツ改革派の信仰の基準であったハイデルベルグ信仰問答に注目していた⁴³。要するに、マーサーズバーグ時代には、教会の歴史の中で信仰の基準として認められてきた既存の信条や信仰告白を土台とした一致を目指していたと言えよう。ところが、先に述べたように、シャッフは、そこから進んで、新しい「キリストの信条」を求めるようになった。その主な理由としては、使徒信条が西方教会を中心としたものであり、東方正教会を含む教会再一致の基礎とするには限界があったことによるものだと考えられる。

⁴² Schaff, *The Reunion*, 29.

⁴³ マーサーズバーグ神学の信条論については、拙論「教派的伝統とアメリカ化の衝突」、19-23頁を参照のこと。

シャッフに「キリストの信条」という構想が芽生えたのは、おそらく1870年代頃だと思われる。この時までには、シャッフは、すでにニューヨークのユニオン神学校に移り、所属教会も、ドイツ改革派から長老派に移っていた。さらに、教派を超えたエキュメニカルな運動にも精力的に関わるようになった⁴⁴。そのような活動を通して、シャッフは、改革派教会同盟(The Alliance of the Reformed Churches)における、新しい「一致信条」(the Consensus Creed)を制定する議論に強い関心を抱き、宗教改革期の信仰基準は、「19世紀の不信仰と合理主義に対抗しうる」ものに翻訳されなければならないと考えたという⁴⁵。

その理解を裏付けるように、1877年に出版された『改革派信仰告白の調和』と題する著書において、シャッフは、次のように終末論的かつキリスト中心の信条に対する構想を語っている。

信条とは、神に関する疑問への人間の応答である。しかし、神の言葉は、最も優れた人間が作った信条よりも秀でていいる。信条とは、信仰の告白である。しかし信仰は、その告白以上のものである。信仰なしには、最良の信仰告白さえ「やかましいシンバル」でしかない。教義的な一致を目指す以上に、より高度な一致、霊的生活における一致、信仰における一致、私たちがキリストへと、そしてどのような教派や信条であれ、キリストを愛する全ての者を結びつける愛による一致がある。ペトロやトマスと共に、キリストを終始一貫して告白しようではないか。⁴⁶

ここにおいて、シャッフは、聖書におけるペトロやトマスの原初的な信仰告白を基礎に、キリスト中心の信仰の告白を想定している。それは、つまり、初代教会から発展した信仰告白と連続性を持ちつつ、キリストの愛によって、教派の違いを超えてキリスト者を一致させる信仰告白である。ここで重要なことは、シャッフの待望するキリスト論的信条とは、教義的一致を目指すことに勝る、より高次の一致として、キリストの愛による一致を考えていることである。その意味で、シャッフの教会再一致論は、教義的一致という次元を超えて、キリストの霊的一致という、神秘主義的な色彩を含んでいると理解することができよう。さらに、ここには「歴史的発展の理論」に基づくマーサーズバーグ神学的なキリスト論が表れていることも指摘できる。つまり歴史を超越して臨在するキリストに結ばれることで、

⁴⁴ David S. Schaff, *The Life of Philip Schaff*, 252-281.

⁴⁵ David S. Schaff, *The Life of Philip Schaff*, 342-343.

⁴⁶ Philip Schaff, *The Harmony of the Reformed Confession, as Related to the Present State of Evangelical Theology* (Eugene, Oregon: Wipf & Stock Publishers, 1877), 64-65.

時代的な隔たりを超えて、使徒たちと共に、同じキリストを告白する者となるのである。

また、翌年に出版された『キリスト教の諸信条』の第一巻では、この概念がより発展しているのを見ることが出来る。同書において、シャフは、「教会は、人によって『告白された』(confessed)キリストのもとに建てられている。そして信条とは、キリストの問いに対する人の応答であり、神の言葉を人が受け取り、解釈したものである」と語っている⁴⁷。さらに、「もし私たちが新しい信条を求めるとすれば、それは、確実に、神の国における様々な部分(訳注: 教派を指す)の不一致や不和ではなく、一致と調和のためのものとなるだろう」と結論している⁴⁸。ここにおいて新しい信条によって、終末論的に諸教派の再一致がなされるというシャフの理解が一層明らかにされていると言えるだろう。この新しい信条は、教派間の相違を際立たせるものではなく、それをもとにキリスト教の諸教派が共に立つことができるものであったのである。

より決定的なのは、1890年に出版された『長老教会の信条改訂』(原題: *Creed Revision in the Presbyterian Churches*, 以下『信条改訂』)と題する著作である⁴⁹。『信条改訂』は、シャフが『再一致』の講演をする3年前に記されたものであり、合衆国長老派教会の再合同によって生じたウェストミンスター信仰基準の改訂に関する議論に対するシャフの意見が記されているという点で重要性を持っている。

しかし、本論に関わる点での『信条改訂』の史的意義は、その中で、単に長老派教会内部の信仰基準改訂の是非という議論を超えて、明確に「キリストの信条」という言葉が用いられていることである。

私たちは、一つの神学、一つの信仰告白を必要としている。それは、私たちの思考の限界をはるかに超えた永遠の聖定(decrees)や、信仰義認の教理や、聖書的基本原则や、あるいはその他の特定の教理から出発するものではない。神人両性であり、世の救い主であるイエス・キリストの生ける人格(the living person of Jesus Christ)から出発するものである。〈中略〉私たちは、一つの神学、一つの信仰告白を必要としている。それは、単に一つの教派内のメンバーだけを一つにまとめ上げるものではない。キリストの一つの群れの中にある様々なまとまりの共感性を結束させるきずなである。そして、将来における偉大な業——キリストの信条(Creed of Christ)によるキリスト

⁴⁷ Philip Schaff, *Creeeds of Christendom*, vol. 1 (London: Hodder and Stoughton, 1878), 5.

⁴⁸ Schaff, *Creeeds of Christendom*, 9.

⁴⁹ Philip Schaff, *Creed Revision in the Presbyterian Churches* (New York: Charles Scribner's Sons, 1890).

教会の再一致への道を備えるものなのだ。⁵⁰

引用した『信条改訂』の箇所には、3年後の『再一致』以上に、「キリストの信条」についてのシャフの理解が端的に表れていると言える。シャフが言及しているように「キリストの信条」というのは、個々の教理的議論に基づくものではない。それは、人間の議論を超越して、教会の頭であるキリスト御自身から生み出されるものである。さらに、それは特定の教派内部だけの一致を目指すのではなく、キリストの群れの中にある様々な教派を一致、調和させるものである。

このことを踏まえる時、これまで論じてきた教会の歴史的発展の理論、そしてキリスト論的、終末論的教会再一致というシャフの神学的洞察が、「キリストの信条」において一つの形で結実しているのを見ることが出来るだろう。その意味において、シャフの「キリストの信条」は、キリストについての神学的議論の要約ではない。それは、キリストを種とし、キリストの命によって育まれる教会が、終末に向かう歴史的発展の中でキリストから与えられる「キリストの果実」であり、キリスト教諸教派間の対立を終末論的、キリスト論的観点から調停しようとするものであった。

結論

これまでシャフの特に後半生における教会再一致の展望、エキュメニカルな教会観について論じてきた。その結果、シャフの教会再一致の神学は、シャフの「歴史的発展の理論」と深い関連性があることが分かった。「歴史的発展の理論」に基づいて、シャフは、教会の頭として教会を終末に至るまで統治されるキリストの主権性を強調し、さらに終末論的希望の中で、教会の再一致を展望するに至ったのである。この点では、シャフの教会の再一致に関する理解は、前半生から一貫性を持っていると言える。

しかし本稿を通して、後半生における思想的発展があることも分かった。それは「キリストの信条」というシャフの理解に象徴されるものであった。シャフの「キリストの信条」は、教会の「歴史的発展の理論」を前提としながらも、後半生において強調されていくことになった。この「キリストの信条」は、終末におけるキリストの再臨と直接的統治による神の国の完成という終末論的な希望に基づくものであった。そして、そのようなキリス

⁵⁰ Schaff, *Creed Revision*, 40-42. 引用文中の下線は、論者が付けたもの。

ト教の終末論的なパースペクティブの中で、シャフは教会の再一致、すなわち「一つのキリストの体なる教会」の回復を位置づけていたことが分かった。その意味で、シャフのエキュメニズムとは極めて終末論的なエキュメニズムと理解することができるだろう。このような終末論的エキュメニズムに達することで、シャフは、19世紀アメリカにおける教会分裂という歴史的コンテクストの中で、将来における教会の再一致に希望を抱くことが可能になったのである。

確かに「キリストの信条」に見られるシャフの教会史観は一面では楽観的な進歩史観に基づくものであり、また過去の教会分裂の原因となった教理論争の中で交わされた諸教派の教理的相違点を軽視するものであると批判的に捉えることもできよう。そこに、シャフのエキュメニズムの限界を見ることもできる。とは言え、19世紀の教会史的状况の中で、諸教派を解消するのではなく、諸教派の歴史的固有性を認めつつ、同時に「キリストにある一つの群れ」としての教会の再一致を希求したシャフの神学的スケールの大きさは今日でも示唆に富んでおり、高く評価されなければならないだろう。